

論文の内容の要旨

論文題目 ダルマラージャの認識論の構造
 —『ヴェーダーンタ・パリパーチャ』知覚章の解説—

氏名 佐藤裕之

17世紀に活躍したとされるダルマラージャ (Dharmarāja) が著した『ヴェーダーンタ・パリパーチャ (Vedāntaparibhāṣā)』はアドヴァイタ (Advaita) 学派の入門書として名高く、標準的なテキストとして広く読まれている。特にその前半部分は、アドヴァイタ学派の数多い文献の中でも認識論を独立のテーマとして扱った唯一のもので、単にアドヴァイタ学派にとってだけでなく、インド哲学の認識論研究にとっても重要視されている。

ダルマラージャの認識論を取り上げた代表的な研究としては、D.M. Datta と S. Satprakāshānanda によるものがあり、『ヴェーダーンタ・パリパーチャ』の翻訳も既に A. Venis、S. S. Suryanarayana Sastri、S. Mādhavānanda によって全訳が発表され、B. Gupta によって知覚章の訳が発表されている。わが国においても、現在まで前田専学博士、村上真完博士が研究に取り組んできた。

ダルマラージャは『ヴェーダーンタ・パリパーチャ』の中で認識手段 (pramāṇa) や正しい認識 (pramā) をはじめとする認識論的術語のそれぞれに定義を与え、分類を示している。先行研究においても、それらの定義や分類を問題にしてきたが、それらの研究には、欠けていた点がある。それは、『ヴェーダーンタ・パリパーチャ』の叙述に対してしばしば「体系的」という評価を与えながらも、そこで展開される認識論の構造を体系的に捉える試みを行ってこなかった点である。個別的な定義や分類はある程度理解できて、

それらを認識論の全体像、認識論の構造という観点で捉えなければ、それらを理解したことにはならないだろう。例えば、正しい知覚知 (pratyakṣapramā) は純粹精神 (caitanya) と定義されているが、一方で、ダルマラージャは正しい知覚知に「<それぞれの感官にとって知覚可能であり、現存し、否定されていない対象に局限された純粹精神>と<それぞれの対象の形相をとった変容に局限された純粹精神>に区別がないこと」という定義も与えている。正しい知覚知の定義を理解するためには、この二つの定義が認識論の構造の中で占める位置を理解しなければならないだろう。ダルマラージャが個々の定義や分類を述べている以上、彼の認識論もその全体像と構造を前提にしているはずである。本論文の目的は、『ヴェーダーンタ・パリパーシャ』によって示される認識論の構造を解明することにある。

本論文は論述部分の第1部と和訳研究の第2部によって構成されている。

第1部では、ダルマラージャの認識論の構造を解明する。まず、ダルマラージャは認識手段 (pramaṇa) を「正しい認識の手段 (pramākarana)」と定義しているから、正しい認識は認識手段から生じる結果として捉えられていることになる。そして、正しい認識には想起 (smṛti) を含める場合と含めない場合の定義が提示されていて、ダルマラージャ自身の立場は明確ではない。しかし、正しい認識を「認識手段から生じる結果」と捉える限り、認識手段ではない潜在印象から生じる想起は正しい認識にはならない、という註釈があり、この解釈に従えば、正しい認識の定義は「以前に知られていることなく (anadhigata)、否定されていない (abādhita) ものごとを対象とする認識」になり、そこから想起は排除されることになる。

認識手段は知覚 (pratyakṣa) ・ 推理 (anumāna) ・ 類比 (upamāna) ・ ことば (śabda) ・ 論理的要請 (arthāpatti) ・ 無知覚 (anupalabdhi) の六種類に分類されている。アドヴァイタ学派の文献でこのような分類を明示するのは『ヴェーダーンタ・パリパーシャ』だけである。この点だけをとっても『ヴェーダーンタ・パリパーシャ』が画期的な位置を占めていることがわかる。認識論の構造の中で認識手段の分類が問題になるのは、分類された知覚等の定義が「正しい認識の手段」という認識手段の定義を共有し、他の認識手段を排除しているかどうかという点であるが、この点で、ダルマラージャが与えた「知覚とは正しい知覚知 (pratyakṣapramā) の手段である」という知覚等の定義に全く問題点は見られない。

認識手段と正しい認識の間に因果関係は成立するのだが、それが知覚と正しい知覚知等の種のレベルになると成立しない、と考えられている。正しい知覚知は知覚からだけ生じるものではなく、推理等の他の認識手段からも生じるとされている。それは、正し

い知覚知は特定的手段に起因するのではなく、「直接的な対象」という特定の対象に起因すると考えるからである。その結果、「知覚は正しい知覚知的手段である」という定義も、「知覚知は必ず知覚から生じる」を意味するのではなく、「知覚からは必ず知覚知が生じる」を意味するだけになる。さらに、「推理は推理知的手段である」という定義も、「推理からは必ず推理知が生じる」を意味するのではなく、「推理知は必ず推理から生じる」だけを意味することになる。このような主張は、ダルマラージャの認識論の構造上の特徴として指摘できる。

そして、ダルマラージャは全ての正しい認識をくそれ自身に関わる面 (svātmāmśa) > とく対象に関わる面 (viśayāmśa) > という二つの面で捉えていたと思われる。正しい認識をくそれ自身に関わる面 > で捉えた場合、全ての正しい認識は正しい知覚知である。この正しい知覚知はいわば広義の正しい知覚知であり、純粹精神 (caitanya) と定義される。推理知も類比知等も全て広義の正しい知覚知であり、純粹精神である。一方、正しい認識をく対象に関わる面 > で捉えた場合、正しい認識は正しい知覚知や推理知等に区別される。く対象に関わる面 > の正しい知覚知は狭義の正しい知覚知であって、「くそれぞれの感官にとって知覚可能であり、現存し、否定されていない対象に局限された純粹精神 > とくそれぞれの対象の形相をとった変容に局限された純粹精神 > に区別がないこと」と定義されるものになる。知覚という認識手段から生じるのは、狭義の正しい知覚知の方であって、広義の正しい知覚知は認識手段から生じるものではない。

知覚知は、①く関係を捉える (savikalpaka) 知覚知 > とく関係を捉えない (nirvikalpaka) 知覚知 >、②くジーヴァを直証者とする (jivasākṣin) 知覚知 > とく神を直証者とする (īśvarasākṣin) 知覚知 >、③く感官から生じる (indriyajanya) 知覚知 > とく感官から生じない (indriyājanya) 知覚知 > という観点・方法の相違によって三通りに分類されている。①と③の分類自体は他学派にもみられるもので、必ずしもダルマラージャの認識論の特徴と考えることはできないが、それらの解釈や例になると、他学派と著しく異なってくる。①のく関係を捉えない知覚知 > は「これはあのデーヴァダッタである (so 'yaṃ devadattah)」「お前はそれである (tat tvam asi)」という文章から生じる認識が例として挙げられているように、同一性を捉える認識のことである。また③のく感官から生じない知覚知 > は「私は楽しい (aham sukhi)」という例が示されているように、マナス (manas) から生じる知覚知のことである。ダルマラージャはマナスを感官とは考えないためにこのような解釈になる。②に含まれる「直証者」という概念はアドヴァイタ学派に固有なものだが、その内容はそれぞれくジーヴァを認識者とする知覚知 > とく神を認識者とする知覚知 > に相当する。これらの点は、分類自体は他学派のものを巧みに採り入れ、独自

の解釈と例を与えることによって、アドヴァイタ学派に特徴的な認識論を体系化したと考えられる。ダルマラージャの認識論の特徴は、知覚知の分類の解釈にもあらわれていると指摘できる。さらに、これらの分類は、純粹精神と定義される広義の正しい知覚知の分類ではなく、狭義の正しい知覚知の分類である。

ダルマラージャの認識論の構造を理解する上で最も重要なのは、彼が正しい認識を<それ自身に関わる面>と<対象に関わる面>という二つの面で捉えていたことになるだろう。おそらくニヤーヤ学派では正しい認識を<それ自身に関わる面>と<対象に関わる面>に区別して考えたりはしない。ダルマラージャの考えにあてはめれば、ニヤーヤ学派では<対象に関わる面>だけの正しい認識しか考えていないことになる。彼が正しい認識をこれら二つの面で捉えることを明言しているわけではないが、このように解釈しない限り、彼が描いていた認識論の構造は理解できないと思われる。そして、正しい認識の二つの面については、<それ自身に関わる面>を本来的な認識、あるいは、究極的(pāramārthika)立場から捉えた認識に、<対象に関わる面>を比喩的な認識、あるいは、日常的(vyāvahārika)立場から捉えた認識に解釈するのが最も適切であるだろう。しかし、<それ自身に関わる面>での正しい認識は純粹精神として区別がなく、<対象に関わる面>での正しい認識は認識手段によって区別があることになるから、この点から考えれば、正しい認識に二つの面があるという主張は、正しい認識をある面で捉えれば区別がなく、別な面で捉えれば区別があるという主張にも解釈できると思われる。

本論文の第2部は『ヴェーダーンタ・パリパーシャ』知覚章の和訳研究である。底本とした S. S. Suryanarayana Sastri 本では序章と第1章にあたる。この部分については、すでに4つの英訳と3つのヒンディー語訳があるが、日本語訳はなく、初めての和訳になる。テキストの読みについては、底本以外の13の公刊本を参照し、異読を示した。